

私の 考 教 学

二年半前まで、小学校の教師だった。教師時代、元の高校に聴講生として通っていた自閉症の下原猛さん(35)と知り合ったことで、学校教育に限界を感じるようになったという。

障害者小規模作業所 「夢屋」代表

宮本 誠一 さん(35)



教育

コーヒーも飲める喫茶店でもある。

五年間続けた教師を辞める最大のきっかけは、個人学習診断テストだった。

「子どもたちに受けさせるのが苦痛だったし、反対も思っていて、はっきりと意思表示しない教師が多いことにも不信感を持ちました。職員室では異論

を言うだけで反感を持たれ、話し合おうという道を開こうと、退職後、阿蘇郡一の宮町に障害者のための作業所「夢屋」をついた。手作りパンを販売し、

教師生活を振り返ると「必要なストレスがたまることが多かった」と言う。五年間続けた教師を辞める最大のきっかけは、個人学習診断テストだった。

「子どもたちの声を聞き入れた取り組みにしても、『一クラスだけはおかしい』などと言われ、元に戻されてしまった。職員室では異論を言っても、はっきりと意思表示しない教師が多いことにも不信感を持ちました。職員室では異論

を言うだけで反感を持たれ、話し合おうという道を開こうと、退職後、阿蘇郡一の宮町に障害者のための作業所「夢屋」をついた。手作りパンを販売し、

自由に論議がでる場を

たんです」

障害者が地域で生活する道を開こうと、退職後、阿蘇郡一の宮町に障害者のための作業所「夢屋」をついた。

「教師自身もシステムの中に組み込まれてしまっている。個人学習診断テストについて、同テスト実施協議会に対し質問状を提出したこともあった。障害児、難病児の母体保護法に

現実はいろんなものに縛られています」

よる中絶容認の動きには、いち早く具に反対の意見書を出した。

教育現場の改革案は、「もっと義務教育にも選択肢を増やすことが必要なのではないでしょうか」と言う。

例えば教科教育を中心にするクラス、人権教育を中心にするクラスなど、教師の感覚があれば、点数だけにこだわらないで、保護者が極端に増えることはないのではないのでしょうか」

作業所には、かつての教え子やその保護者たちがよく顔を出す。「保護者も教師も、自由に論議できる場が必要だ。いろんな人が立ち寄って、自由に何でも話せる場。『夢屋』をそんな所にしたかったら、と思っています」

「子どもや保護者も多様な化し、要望もバラバラです。教師も何を教えるか、が自分で選べない。こんな教育をしたいと思っても、現実はいろんなものに縛られています」

「子どもや保護者も多様な化し、要望もバラバラです。教師も何を教えるか、が自分で選べない。こんな教育をしたいと思っても、現実はいろんなものに縛られています」

「子どもや保護者も多様な化し、要望もバラバラです。教師も何を教えるか、が自分で選べない。こんな教育をしたいと思っても、現実はいろんなものに縛られています」

「子どもや保護者も多様な化し、要望もバラバラです。教師も何を教えるか、が自分で選べない。こんな教育をしたいと思っても、現実はいろんなものに縛られています」